

より残存率はむしろ高いことなどである。

そして、出水によって全滅した個体群の回復について、次のように考察した。すなわち、1) 分布上限における消失後の次世代の回復は下流からの成虫の湖上産卵に依存していること、2) 分布中心域での小礫底における流出後の回復は、隣接する大礫底からの幼虫の流下と移動に依存していることなどである。

5. 流水・昆虫の生態研究の展望

わが国における流水棲昆虫の生態研究は、川村(1918)にはじまり、上野(1935)、可児(1944)、今西(1941)津田(1942, 1943, 1962)、津田・御勢(1954)等によって進められた。

その後、四万十川(1976)、長良川(1957)、宇川(1957)、吉野川(1966, 1967)、新潟県(1970-1982)、神奈川県(1979-1984)の諸河川、円山川をはじめとする近畿・山陰・北陸地方諸河川(1957-1983)その他において、河川底生動物の調査研究が進められ、多くの報告がつきつぎに発表されている。

上記の調査により、わが国各地の河川底生昆虫相がかなり明らかになったのは事実である。しかし、一方で基礎的な研究をみると、それ程多くないのが現状である。このような状態の中で、谷田(1980, 未発表)のシマトビケラ科、伊藤(1983, 1984)のカクツツトビケラ科、大野(1981)のユスリカの種類と生態に関する研究、大串(1981)の水生昆虫の生態全般にわたる解説、竹門(未発表)のモンカゲロウ、青谷(未発表)のヒゲナガカワトビケラの生態研究などは注目すべきものである。また私は、最近ヒゲナガカワトビケラについて生活環を通しての個体群動態をまとめ発表した(第4章参照)。

なお応用分野として、環境の指標生物としての研究、発電害虫としてのトビケラの研究である。

また外国での流水棲昆虫の研究は、1970年代に入って急速に発展しつつあり、そのようすは最近出版された Resh & Rosenberg(1984)によくまとめられている。

文 献 省 略

《新 刊 紹 介》

- 書 名 こんにちは遺伝子さん
メンデルからバイオテクノロジーまで
著 者 小 嶋 良 平
(神戸市立須磨高等学校 教諭)
内 容 第1部 メンデル法則がわかるまで
第2部 遺伝子はどこにある？
第3部 遺伝子って、どんなもの？
発行所 神戸新聞出版センター
定 価 1,200円

推薦のことは

神戸大学教育学部教授 理学博士 中西 哲
本書では、メンデルがエンドウでみた遺伝現象から最新の遺伝子組かえに至る話題や知識が、遺伝学の歴史に沿ってストーリー化してある。誰でも楽しく読み進むことができ、知らず知らずのうちに、遺伝の基礎を理解することができる、類をみない好著である。

神戸市立教育研究所指導主事

理学博士 前田 保夫

遺伝子とか、バイオテクノロジーときけば、記号がいっぱいの本だと思うでしょうが、そんな心配はいりません。こんな程度の低い質問をしては恥しいと思うような初歩のレベルから始まり、将来の方向までを明快に示した楽しい本です。

兵庫県立長田高等学校教諭

前田米太郎

教える先生の立場からでなく、生徒の立場で書かれているし、遺伝学者のエピソードや時代の背景などが随所に出てくるので、楽しみながら抵抗なく理解できます。

神戸市立須磨高等学校長

小久保富男

アイデアマンであり、優れた実践家でもある小嶋氏の面目躍如たる本書は、多感な高校生たちに、生命の神秘に対する畏敬の念と、尽きない興味を抱かせるきっかけをつくるものと確信します。